中央地域の文化遺産
（中央東・中央西・小戸地域自治区管内）

【地域の歴史と特色】

市内中心部に位置する中央地域は、大淀川北岸に形成された沖積低地で、古くは宇佐八幡宮の荘園であった渡別府の所在地と推定されています。
江戸時代には、飫肥藩領であった旧恒久村分（瀬頭・松山・吾妻町・堀川町）を除くと、ほとんどの地域が延岡藩領（旧上別府村・池内村・下北方村）に属していました（一時、幕府領の時期あり）。往還筋にあった上野町には、対岸の中村町への渡場があり、旅人宿が置かれるなど、人と物資の集散地として賑わいを見せました。
明治6年（1873）、宮崎県が成立すると宮崎郡上別府村に県庁が置かれました。また、大正～昭和初期にかけては、鉄道開通を契機として急速に発展し、現在の市街地の原形が形成されました。

【文化遺産マップ】

みやざきけんちょう
① 宮崎県庁

みやざきけんちょうほんかん
宮崎県庁本館（国登録有形文化財）

宮崎県庁本館は、総工費約72万円（当時の予算）をかけて建設が行われ、昭和7年（1932）10月に完成しました。鉄筋コンクリート造、地上4階・地下1階建で、設計は、茨城県庁をはじめ、多くの公共建築物の設計を手がけた置塩章によるものです。建築様式にはネオ・ゴシック建築が取り入れられており、戦前に建てられたものとしては数少ない、貴重な近代建築物の一つとなっています。

昭和7年は、宮崎県庁のほか、橘橋（永久橋）の架け替えや橘通りの拡張などの大事業が行われ、中心市街地の装いが一新した年となりました。

きゅうだいいちかんぎょうぎんこう
旧第一勧業銀行（景観重要建造物）

宮崎県庁5号館（宮崎県文書センター）は、宮崎農工銀行として大正15年（1927）に建築され、後に第一勧業銀行宮崎支店の建物として使用されていました。宮崎県内でも珍しいレンガ貼りの外観は、近代化の道を歩んだ県都発展のシンボルとして、現在もその景観を残しています。

けんちょうまえのふぇにっくす
県庁前のフェニックス（景観重要樹木）

フェニックスは、宮崎県の県木となっており、南国宮崎を代表する樹木として、市内各地の観光地や学校などに植樹されました。特に、国登録有形文化財に指定されている宮崎県庁本館前にそびえる２本のフェニックスは、樹高が高く、樹形も良好で、市民・県民・観光客など多くの人々に親しまれています。

いけだけじゅうたくしゅおく
②　池田家住宅主屋（国登録有形文化財）

池田家住宅は、大正から昭和初期にかけて全国で数多く建設された和洋折衷の都市住宅の一つです。和風部分の北東に付属した応接間は、傾斜のきつい桟瓦葺き切妻屋根で、屋根窓を設け、外壁は下見板張やタイル貼とした洋風意匠となっています。設計者や施工業者は分かっていませんが、昭和初期に、弁護士で小林町（現小林市）の町長などを務めた森由己雄の邸宅として建てられたと伝えられています。

住宅前の通りは、明治から大正期にかけて宮崎に滞在したアメリカ人宣教師シ・エ・クラークが近くに居を構えたことに因んで、通称「クラーク通り」と呼ばれています。池田家住宅は、この界隈に数多く見られた和洋折衷住宅の中で、現在に残る数少ない貴重な文化遺産となっています。

し・え・くらーくどうぞう
③　シ・エ・クラーク銅像

栄町街区公園の一角に、アメリカ人宣教師シ・エ・クラーク(1851-1933)の銅像があります。

シ・エ・クラークは、明治25年(1892)から大正14年(1925)までの約34年間、現在の日本赤十字社宮崎県支部の辺りに居を構え、キリスト教の布教に努めるとともに、日向訓盲院（現在の県立明星視覚支援学校）の設立に尽力しました。また、宮崎県にはじめて自転車を輸入し、後には自動車を自ら運転するなど、アメリカ文化を県内に積極的に移入した人物として知られています。

帰国後に死去しましたが、遺言により、夫人が眠る市内春の山墓地に葬られました。

さいごうたかもりちゅうとんちあと
④　西郷隆盛駐屯地跡

南広島通りの一角に「西郷隆盛駐在跡」碑と「敬天愛人」碑があります。

明治10年(1877)5月、薩軍は宮崎本営の名で鹿児島県宮崎支庁に対し軍政を布告し、支庁を「軍務所」と改称して、募兵と資金調達を開始しました。その際、桐野利秋が川原町の旧宮崎県権令の官舎、島津啓次郎が中村町の福島邦成邸、そして西郷隆盛が南広島通りの一農家など、各所に薩軍要人の官舎が置かれました。西郷の宿舎では、私学校党が昼夜付近を警備し、近所の町民は西郷の姿をほとんど見ることができなかったと言われています。

⑤　宮崎八幡宮（みやざきはちまんぐう）

創設年代は不明ですが、国司海為隆のとき、宇佐八幡宮領として渡別府が立券された際、その鎮守として勧請されたと考えられています。明暦2年（1656）の棟札には「渡別府村八幡宮」、延宝5年（1677）の棟札には「渡別府八幡宮」とあり、大檀那には延岡藩主有馬康純の名が記されています。

古くは、毎年9月の祭礼において、神馬3疋・流鏑馬1疋で神事が勤められ、その諸入用は上別府村内で高割されていました。

⑥　木造阿弥陀如来坐像一軀（県有形文化財）（もくぞうあみだにょらいざぞういっく）

木造阿弥陀如来坐像一軀は、宮崎市老松通の観音堂に祀られていたもので、現在は宮崎県総合博物館に保管されています。像高50.2cm、ヒノキの寄木造の坐像で、螺髪（らはつ）は細かく整い、面相にも穏やかな彫り口の目鼻立ちを刻んでいます。平安時代末期の作に見られる如来像の特徴をよく備えているということで、昭和40年8月17日に、宮崎市で初めて県の有形文化財に指定されました。

⑦　江平池（えひらいけ）

現在の西池地区には、かつて江平池と呼ばれた大きな溜め池がありました。

江平池には、江平東池と江平西池があり、江平東池は、すでに延享4年（1747）の記録に溜め池として記されています。当時でも、いつ設けられたか分からない程古い溜め池だったようで、大きさは南北約400m、東西約800m余もありました。

その後、東池は昭和4年（1929）～7年頃に埋め立てられ、昭和25年（1950）頃には、残った江平西池で貸しボートが浮かべられましたが、この西池も昭和30年頃から埋め立てられてしまいました。

現在の江平東池跡には江平小学校、江平西池跡には西池小学校がそれぞれ建てられています。

旧江平東池跡地（現江平小学校敷地内）

旧江平西池跡地（現西池小学校敷地内）

⑧ おどのわたし 小戸の渡

大淀川の最下流は、古くから「小戸の渡」と呼ばれています。宮崎市役所の東玄関近くには、この地を訪れた伊東義祐が神代の時代に思いをはせて詠んだと言われる歌碑が立てられています。

「神代よりその名はいまも橘や
　　小戸のわたりの船の行く末」

⑨ おどじんじゃ 小戸神社

小戸神社は、旧称を「小戸大明神」といい、社伝によると約1900年前の景行天皇の勅により創建されたと伝えられています。

歴代伊東氏当主の崇敬は篤く、都於郡城主伊東祐堯によって文明5年(1473)に社殿の造営が、延徳2年(1490)にその修復が行われ、この頃には30町もの神領を有していました。その後、数回の造営が行われましたが、戦国期の相次ぐ戦乱により宝物や旧記等はことごとく失われたと言われています。

当初の社地は下別府にありましたが、寛文2年(1662)の大地震（通称外所地震）により上野町に遷座しました。寛政4年(1792)には、高山彦九郎が中村町から上野町へ渡り、その日記に小戸大明神の御旅所を拝したと記されています。

明治維新後に「小戸神社」と改称し、さらに、昭和9年(1934)の橘通りの拡張により現在地へ遷座しました。

なお、境内は、宮崎市の「緑の保全地区」に指定されています。

おどじんじゃのおがたまのき 小戸神社のオガタマノキ

小戸神社の神門をくぐり境内に入ると、姿の美しいオガタマの神木が迎えてくれます。一説によると、芸能の神として崇められるアメノウズメノミコトは、このオガタマの木の実を振りながら踊ったと言われています。また、この実の形から「神楽鈴」が作られたとも言われています。

オガタマの木は、「招魂（おぎたま）」が訛ったものといわれ、神社に多く植えられており、古来から人々に神木として崇められてきました。